

平城宮跡と平城京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では1978年度に第110次から第115次までの28件におよぶ発掘調査を実施した。平城宮内では東院地区東南隅の庭園遺構に北接する地区の調査（第110次）、推定第一次朝堂院地区の東第二堂を中心とする調査（第111次）、それに推定第二次大極殿の調査（第113次）を行なった。また平城京内では北辺坊、唐招提寺戒壇院など各所において調査を行なった。更に京外においても法隆寺西南院、頭塔のほか平城ニュータウン予定地内の遺跡について範囲確認調査を行なった。以下別項で報告する平城宮推定第二次大極殿、頭塔、平城ニュータウン予定地内の石のカラト古墳の調査を除き、おもな調査の概要を報告する。

調 査 地 区	遺 跡 ・ 調 査 次 数	調 査 期 間	面 積	備 考
6 A L F	平城宮 第110次	78. 6.28～11.13	21.00 a	東院地区
6 A B G・B H・B T・B U	平城宮 第111次	78. 4. 3～ 7.15	33.00 a	第一次朝堂院
6 A A R-A・B	平城宮 第113次	78.10. 1～79.2.7	21.00 a	第二次大極殿
6 A C V・B Z	平城宮 第112-11次	79. 3.15～ 3.19	0.4 a	朱雀門・宮南面大垣
6 A B G	平城京 第112-1次	78. 5. 2～ 5.30	4.90 a	右京一条三坊三・四坪
6 A G R	平城京 第112-2次	78. 5. 4～ 5. 9	0.045a	北四坊一坊大路
6 A F I	平城京 第112-3次	78. 7.01～ 7.25	3.01 a	左京三条二坊七坪
6 A G S-A	平城京 第112-4次	78. 8. 7～ 8.22	2.84 a	北辺三坊一・二・三・四坪
6 B F K-I	平城京 第112-5次	78. 8.17	0.06 a	法華寺旧境内
6 A G A-L	平城京 第112-6次	78. 9.20～ 9.22	0.42 a	右京一条二坊六坪
6 A G R-B	平城京 第112-7次	78.10. 1～11.16	3.60 a	北辺二坊二坪
6 A G A-D・K	平城京 第112-8次	78.11. 6～11.16	3.50 a	右京一条二坊二坪
6 A G O	平城京 第112-9次	78.11.21～12. 4	0.60 a	右京五条二坊十二坪
6 B F K-I	平城京 第112-10次	78.12.23～12.27	0.12 a	法華寺旧境内
6 A F C	平城京 第112-12次	79. 3.26～ 3.27	0.03 a	左京一条二坊十坪
6 A G A-J	平城京 第112-13次	79. 3.27～ 3.28	0.20 a	右京一条二坊七坪
6 B Z T	第114次	78. 7.17～ 8.16	1.97 a	頭塔
平城ニュータウン	第115-1次	79. 1.13～ 1.26	2.00 a	古墳（13号地点）
〃	第115-2次	79. 1.20～ 1.25	1.32 a	散布地（14号地点）
〃	第115-3次	79. 1. 8～ 3.31	21.00 a	音如ヶ谷瓦窯（9号地点）
〃	第115-4次	79. 1. 9～ 3.31	3.13 a	石のカラト古墳（7号地点）
〃	第115-5次	79. 3. 6～ 3.12	0.50 a	大仙堂（5号地点）
〃	第115-6次	79. 3. 7～ 3.12	0.38 a	散布地（6号地点）
6 B T S	唐招提寺	78. 5.29～ 6.22	0.57 a	戒壇院
6 B S D	西大寺	78.10.25～10.27	0.18 a	金堂院
6 B Y S	薬師寺	78.12.11～12.25	0.90 a	宝積院
6 B T D	東大寺	78. 8.17～ 8.29	0.325a	南面大垣
6 B H R	法隆寺	78.12. 7～79.1.25	2.80 a	西南院

第1表 平城宮跡と平城京跡発掘状況

1. 平城宮跡の調査

東院地区の調査（第110次） 調査区は平城宮東院東南部に位置し、これに南接する地域は第44次調査（1967年）と第99次調査（1971年）で大規模な庭園造構を検出しており、奈良時代の新旧2時期にわたる園池の造替を確認している。本調査はこの園池の北域を明らかにすることを目的として、約2100㎡を発掘した。西北から東南に下がる自然地形に応じて複雑な整地の様相をなしてはいるが、おおむね3層に大別できる。

下層整地面でA～D期、中層整地面でE期、

第1図 平城京内発掘調査位置図

上層整地面でF・G期と計7期にわたる遺構変遷が明らかとなった。またA期以前においても遺構の存在を部分的に確認したが、全体配置の把握には到らなかった。園池との関連では、B～D期は旧池に、E～G期は新池に伴なっている。おもな検出遺構には礎石建物4棟・掘立柱建物12棟・掘立柱塀5条・溝19条・石敷道路4条がある。以下時期別に述べる。

A期 東面築地大垣の造営と併行して下層の整地を行い、大垣に近接して掘立柱東西棟建物S B9065・9066を建てる。大垣西雨落溝S D9040Aは側壁に径40cm程の自然石を組み、底には小礫を敷く。第44次調査で検出した東雨落溝S D5815との心々距離は約6mとなる。大垣下を抜ける木樋暗渠S D9056Aは厚さ約10cmの厚板を底に3枚、両側壁に各1枚を組み合わせており、樋内から平城宮Ⅰ・Ⅱ期の土器が出土した。大垣は粘質土を乱雑に積上げたもので、最高約1mの高さで遺存する。

B期 園池の開設に伴なう時期で、北を画する掘立柱塀S A9063を設ける。東院南面大垣心から北100.5m（340尺）に位置する。堀の内外では掘立柱東西棟建物S B9067・9068がA期の配置を踏襲して建つ。調査区南端では池への導水路S D8456と、これに繋がる屈曲した石組溝S D9046～9050がある。溝に接しては小石敷造構S F9043・S X9099があり、池北岸の散策に供する施設とみられる。

C期 庭園区画を北へ10尺広げてS A9060によって北を画するとともに、斜行する掘立柱塀S A9061を取り付けて西の境界を設ける。斜行塀の設置の結果、石組溝等はやや移動する。区画外北方ではS B9068が二面廂付掘立柱南北棟建物S B9070に建て替わる。

D期 西を画していた塀S A9061と掘立柱東西棟建物S B9067を撤去した跡に、大規模な南廂付礎石建東西棟建物S B9071が中央に、掘立柱南北棟建物S B9072が東端に建ち、旧池北域が最も整備される。区画外北方ではC期のS B9070がやや規模を大きくS B9073に建て替わる。

E期 新池の開設に伴なう時期で、調査区内全域に中層整地が施こされる。A期以来の東面

第2図 第110次発掘遺構図

第3図 第110次遺構変遷図

大垣にも手を加え、雨落溝を改修すると共に暗渠を木樋から凝灰岩組みにする。北を画した塀 S A 9060 は取り払われ、同位置に石敷道路 S F 9057 が通る。池の北岸にあった石組溝等は廃棄され、礎石建南北棟建物 S B 9075 と掘立柱東西棟建物 S B 9076 が建つなど、前期までとは配置計画を異にする。S B 9075 は側柱と入側柱の掘形を一連にしており、径約 1 m の礎石には八角柱の当り痕跡が残る。

F・G 期 上層整地を施した後に再び北を画する塀 S A 9064 が設けられるが、その位置は東院南面大垣心から 93m (310 尺) となり園池北域が縮小する。このため池北岸の建物 S B 9077・9081 は桁行 3 間と小規模になるが、いずれも礎石建てとなり、D 期以来の方針を継ぐ。区画外北方は逆に南に拡大したため建物は 2 棟 S B 9078・9079 が建つ。S B 9079 は G 期に総柱建物 S B 9080 へと建て替わる。このように新池に伴う北域は F 期をもって整備を終える。

遺物 木簡は総数 66 点が出土したが、削片が半数を越えており、また全般に習書を示したものが多く、年紀の記載はみられない。A 期以前の土壘 S K 9090 から出土した 20 点の内には里名を列記した短冊型木片があり、一字表記の里名もあることから奈良初期と推定できる。

土器類は A 期以前の斜行溝 S D 9041 および A 期の整地層と木樋暗渠から平城宮 I・II 期のものが出土し、E 期の石敷路 S F 9057 の上面からは V～VII 期のものが出土した。特異なものとしては下層整地土から製塩土器が、中層整地から越州産青磁壺が、上層整地から水鳥形硯が出土している。

瓦埴類は 500 点を越える軒瓦と、緑釉埴 2 点・二彩釉平瓦片 1 点などがある。軒瓦は 6282 型式 81 点・6721 型式 100 点など第 III 期のものが最も多く、上層整地土中に主としてみいだした。

まとめ 各期の年代は未確定ではあるが、A 期以前は木簡の記載法から和銅年間頃に、B 期は旧池の開設される養老年間以前に、E 期は整地土に含まれる遺物から天平勝宝年間と推定される。今回調査により、東院地区は奈良初期にすでに大垣築造などの整備をしていることが判明した。また庭園地区の北を画する塀を検出し、後期には区画が縮小していることを確認した。

推定第 1 次朝堂院の調査 (第 111 次) 調査地は第 102 次調査地の南に接し、発掘区のはば中央に朝堂院の推定南北 2 等分線が想定され、東第 2 堂の推定土壇が南北に延びている。検出された主な遺構には、礎石建物 1 棟 (推定東第二堂)、掘立柱建物 1 棟・掘立柱塀 1 条、築地塀 1・溝 12 条などである。奈良時代の遺構は整地層によって 5 期にわかれる。

第 1 期 整地以前の時期で S D 9020 がある。素掘りの東西溝で造営時の区画溝の可能性がある。

第 2 期 第 1 次整地層に造営された遺構で S D 3765・S A 8410・S X 8956・S D 8944・S D 8945 がある。S D 3765・S A 8410 に関しては、先の調査と変る所はない。S X 8956 は、S D 3765 の東約 35m に位置する幅約 11m、深さ約 0.4m の溝状の遺構であり、性格は不明であるが、第 4 次整地に際して埋められる。

第 3 期 第 2 次整地層に造営された遺構で S A 5550 A・S D 3715・S F 8950・S D 8947・S X 8941・8942 がある。第 1 次朝堂院の東を画す S A 5550 は保存状態が極めて良好で、今回の調

査でその変遷に関して新しい知見を得た。S A5550Aは基壇を持つ掘立柱塀で、その後2回改修され、木塀B—築地Cと変遷することが明らかになった。S F8950は発掘区の東端にあり、第2次内裏外郭の南門 S B8160に通ずる南北方向の道路である。S D8947はその西側溝であり、S X8941・8942はS F8950に敷設された暗渠である。

第4期 第3次整地層に造営された遺構で東第2堂が造営され、この時点で朝堂院区画が完全に整備される。S B8550は今回の調査で桁行8間分を検出したが、先の調査分と合せて梁間4間、桁行12間以上の規模となる事が明らかになった。基壇土の残りがよく、柱間・礎石据付法に関する良好な資料を得た。根固石から桁行14.5尺等、梁間11.5尺に復原される。礎石据付の手順は、基壇築成がある程度まで進んだ段階で皿状の掘形を掘り、川原石を詰め込む。その上に礎石を据え、割石を周囲に詰め、版築で礎石の頂上近くまで積み上げる工法を取っている。S B8555は、S B8550の足場であり、S X9015・S X9016もS B8550の建設に伴う遺構と考えられる。東西溝S D9024・S D9025は、S B8550の柱筋に合っており、第2堂への通路S F9026の両側溝と考えられる。S A5550は3期以降、2回の改修があり、改修の時点は不明であるが、掘立柱木塀—築地と変遷をたどる。S B8980は、築地に開く、くぐり門である。

第5期 第4次整地層に造営された遺構で、S B8960・S A8967・S X8954・S K8948等がある。第4次整地はS X8955を埋める程度の小規模な整地で、この上に桁行8間以上、梁間4間(10尺等間)の二面廂付南北棟建物S B8960が造営されている。S B8960の柱掘形は小さく、

長方形と円形のものがあり、残存していた柱根は、いずれも黒木の広葉樹であり、S B8960は仮設的な建物と考えられる。これらの遺構は、朝堂院の廃絶に関係する遺構と考えられる。朝堂院がその機能を失った後、S A5550とS B8550の間隙部は一時鍛冶工房として使用される。その後、この間隙部には瓦が詰め込まれ、全体的に整地され、奈良時代の遺構は完全に埋め尽くされる。

遺物 木簡は総数24点あり、S K8948の1点を除くすべては、S D3715からの出土である。なかでも、神亀5年の紀年のある瓦の進上に関する木簡が目目される。土器類の出土量は少なく、主としてS D3715から出土した。土器は平城宮Ⅱ～Ⅴ期(725～780年頃)が主体をなす。軒瓦は、総数1048点あり、大半はS A5550とS B8550間を埋め立てた瓦層から出土している。瓦層出土の軒瓦のうち7割を占めるのがⅡ期(721～745)の瓦で、6313・6685がきわだっただけ多い。その他、銅鈴・帯金具・サンゴ玉等がある。

まとめ 調査の結果は、S A5550の変遷以外は、先に行なわれた第97・102次調査の所見とほとんど変る所はない。畦畔からも想定されるように、第1次朝堂院の南北長が第2次朝堂院の大極殿回廊から12堂院南門までの距離と同じであるならば、第1次朝堂院の配置は、第2次のそれとは異なり、東西に各2棟の南北棟が配置されている可能性が強くなったと言えよう。

朱雀門・南面大垣の調査(第112—114次) 平城宮南面の東西水路改修に伴う事前調査として、5ヶ所にトレンチを設定し、朱雀門および南面大垣の遺構を検出した。

朱雀門は第16次調査(1964年)で棟通りと北側柱列を検出しており、桁行・梁間共に17尺(5.05m)等間と判明している。今回は南側柱筋にあたり、調査の結果、棟通柱筋の南17尺の位置で、礎石の抜き跡に残存良好の根固め石を検出した。前回の調査と合せて、朱雀門桁行5間、梁間2間の全柱位置を確認することとなった。基壇は東西31.6mにわたる掘込み地業をしているが、調査区狭小のために深さ1.3mまでを確認するに留まった。

大垣は地山を削り整地の後に版築を施しており、遺存度のよい所で高さ0.8mを測る。

遺物は瓦類だけで、軒瓦はすべて藤原宮式であり、前回調査と同様な状況を示した。

2. 平城京の調査

唐招提寺戒壇の調査 本調査は唐招提寺戒壇へのストーパー建設に伴う事前調査である。戒壇の封土は、地山の上に版築土・文禄倒壊後の積土・元禄再興時の積土・大正修理時の積土の順に層位をなしている。地山は戒壇部分を周辺より約1.2m高く水平に削り残しており、この上に厚さ0.6mほどの版築層が残る。版築土は地山と類似の土を用いるなど当初の版築とみられる。造営時期に関しては、寺の創建に伴うとする説と弘安7年とする説があるが、いずれとも解明できる資料は得られなかった。

版築土の上には厚さ0.1mほどの暗黄褐色土層がある。上面では方一間の小建物の礎石と土壙・小ピットを検出した。土壙からは炭化物や飾金具などと共に8世紀後半と推定される埴仏12個体分が出土した。また、小建物は「招提千歳傳記」の戒壇堂の条に見える「文禄五年(慶

長元年)大地震。此時殿堂多倒。此殿又倒。久成莓苔之地。僅有小屋覆壇耳。」の記事に符合するとおもわれる。

暗黄褐色土層の上には厚さ0.6mほどの積土があり、現戒壇化粧石の裏込め土はこの層から切り込まれている。積土には古代から近世にかけての瓦片や中世以降の瓦器片を含み、緑釉を施した瓦片・陶器片もみられた。上面では礎石の抜き取り跡を検出し、奈良県所蔵の戒壇堂跡実測図(明治)にみえる礎石配置に一致する。元禄年間の再興に伴うものとみられる。

以上のように、創建時期の解明はできなかったが、当初の遺構の残りのよいことが判明し、また倒壊から再興への変遷を文献のみならず遺構の上からも裏付けることができた。

平面図

断面図

第5図 唐招提寺戒壇発掘遺構図

条坊遺構の調査(第112—3・8次) 第112—3次調査では左京三条二坊二・七坪の坪境小路を確認した。また小路の東側では七坪内の一部を調査して4期以上の重複関係をもつ掘立柱建物9棟を検出したが、いずれも建物の一部しか確認できず全体配置は明らかでない。小路の幅は側溝心々約7mで、東側溝幅0.7~1.5m、西側溝幅1.2~2.6mを測る。小路心は朱雀門心から

東665.55m (2250尺) に位置し、条坊計画の1坊(1800尺) + 1坪(450尺) に相当する。側溝からは土師器・須恵器がまとまって出土し、緑釉陶器・土馬・墨書土器・漆付着土器などもみられる。奈良時代の初期に造営され、平安時代初期に廃絶されたことが判明した。

第112—8次調査では右京一条二坊二・七坪の坪境小路と二坪東端部に整然と配された掘立柱南北棟建物3棟を確認した。また3期にわたる古墳時代の遺構が存土し、掘立柱建物3棟・掘立柱塀1条・堅穴住居1棟がある。小路の幅は側溝心々約8.3mで、東西側溝幅は共に1.2mほどである。西一坊大路心から西へ480尺を測り、推定位置より30尺西へずれていた。

その他に条坊解明を主目的としての調査には第112—1・7次などがあるが、掘立柱建物の一部を検出するに留まり、削平等のため条坊遺構の確認はできなかった。

3. 平城ニュータウン予定地内遺跡の調査

1972年度、1973年度に引き続き、日本住宅公団平城ニュータウン造成工事予定地内遺跡の範囲確認調査を京都府教育委員会および奈良県教育委員会の依頼を受けて行なった。本年度の調査は前回の調査にもれた地点および再調査が必要な地点をとりあげ、当初の分布調査であがった地点のうち造成事業地外となった地点を残しておおむね本年度をもって予備調査に一応の結論を得、今後の遺跡の保存整備計画に資することとなった。調査地は奈良県側3ヶ所、京都府側3ヶ所であるが、これらについてはすでに京都府教育委員会により報告されている(『奈良山一Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1979・3)ため詳述をさけ、第9号地点(音如ヶ谷瓦窯)について簡単に報告する。なお第7号地点(石のカラト古墳)については別項で報告する。

音如ヶ谷瓦窯(第9号地点)の調査 調査地は京都府相楽郡木津町音如ヶ谷にあり、奈良山丘陵の東側裾部に位置している。2100㎡にわたる調査の結果、発掘区の北半部で瓦窯4基とそれに付属する小規模な掘立柱建物5棟を検出した。これらの遺構は2時期に区分されるが、ロストル式と呼ばれる4基の平窯は2基で1組となる2グループに分けられ、窯壁の瓦の積み方や排水処理方法、焚口の方向などに時期による相異がみられる。掘立柱建物の柱穴はいずれも小さく、柱間寸法も5~7.5尺と小規模であり、作業場あるいは資材置場と考えられる。時期については出土遺物から天平宝字頃とそれに続く時期と想定される。遺物は大半が瓦窯跡とその前庭に掘られた土壌から出土した。軒瓦には軒丸瓦6型式29個体、軒平瓦4型式195個体がある。土器は灰原下層の土壌から多量の土師器と少量の須恵器が出土した。これらの土器は平城宮Ⅲ期のSK820と時期的に併行する時期の一括資料である。

(巽 淳一郎・清水 真一・井上 和人)

第6図 音如ヶ谷第1号窯